

2024年1月14日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 27 : 1~14

マタイによる福音書 6 : 5~13

「主の祈り」

(ハイデルベルク信仰問答 祈りについて 問 118~119)

※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【招詞】 コリントの信徒への手紙二 5章 17節

【讚美歌】 27 「父、子、聖霊の」

【詩編交読】 詩編 143編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】 8 「心の底より」

【祈祷】

【聖書】 詩編 27 : 1~14

マタイによる福音書 6 : 5~13

【説教】 「主の祈り」

<救われた者の感謝の生活としての祈り>

わたしたちは、主の日の礼拝ごとに、『ハイデルベルク信仰問答』によって示されたところから、聖書の御言葉を聞いています。今は、『ハイデルベルク信仰問答』は「祈りについて」というところに入りました。

「祈り」は、神の御子イエスさまによって、罪の中から救い出され、神さまと共に生きる者とされたわたしたちの、感謝の生活において、最も重要なものの一つです。

祈ることは、わたしたちの信仰生活を支える土台であり、この人生を、毎日の生活を、神さまと共に生きていくこと、そのものなのです。

「祈り」とは、神さまと対話をすることです。神さまと、親しく交わることです。

本当は、神さまはあまりに偉大で、あまりに輝かしく、あまりに聖なるお方ですから、神さまに背き、離れ、罪に汚れていたわたしたちは、親しくお声かけなどできる者ではありませんでした。

でも、神さまは、そのようなわたしたちを、愛してくださり、憐れんでくださり、御子イエスさまを遣わして、わたしたちの罪を赦してくださいました。そして、聖霊を与え、信仰を与え、わたしたちを神さまと共に生きる者としてくださったのです。

神さまの方が、わたしたちの名を呼び、ご自分の御許へと招いてくださったのです。

ですから、祈りは、わたしたちから神さまに呼びかけるようなイメージがあるかも知れませんが、実は反対です。

わたしたちをお造りになった神さまの方が、先に、わたしたちを愛し、救い、守り、ずっと名前を呼び続けてくださっていたのです。

そうして、やっと、わたしたちの方が、自分を呼び、招いて下さっていた神さまを、知っていく。イエスさまによる救いを知り、愛を知り、恵みを知り、聖霊を受け、神さまの呼びかけにお応えしていく。それが、信仰を与えられる、ということであり、そうして、神さまの招きにお応えして、「祈ること」が始まっていくのです。

わたしたちは、祈りによって、生きておられる神さまと、対話をしながら、関係を築きながら、信仰の道を、この人生を、歩んでいきます。対話の相手は、わたしに命を与え、罪から救い、愛を豊かに注いでくださる神さまなのです。わたしたちは、いつも確信をもって、安心して、すべてのことを委ねて、祈っていくことができます。

わたしたちが、神さまの前に立って、神さまに向かって、「父なる神さま」と祈ることができるというのは。そのこと自体が、神さまに救われ、恵みをいただいているという、確かな証拠なのです。

<求めるべきこと>

さて、前回の『ハイデルベルク信仰問答』の間 117 では、その祈りの恵みの中であって、わたしたちには、神さまに喜ばれる祈りをするのが求められている、ということが語られていました。

そして、その神さまに喜ばれる祈りの一つに、わたしたちが、「唯一のまことの神さまにのみ、この方がわたしたちに求めるようにとお命じになってすべての事柄を、わたしたちが心から請い求めること」である、と教えられていました。

そして、今回の間 118 は、その問答を受けて、神さまが「わたしたちに求めるようにとお命じになったすべての事柄」とは何か、ということをお話しているのです。

間 118 にはこうありました。「問 118 神はわたしたちに、何を求めるようにとお命じになりましたか。」「答 霊的また肉体的に必要なすべてのことです。主キリストは、わたしたちに自ら教えられた祈りの中に、それをまとめておられます。」

ここでは、わたしたちが、祈りによって、神さまに求めるべきことは、「霊的また肉体的に必要なすべてのこと」だと言っています。

霊的また肉体的に必要なこと。つまり、わたしの信仰も、心も、精神も、思いも。また、健康も、食べ物も、生活も、仕事も、人間関係も。わたしが生きる上での、あらゆることについて、わたしたちはすべて、神さまに祈り求めるべきだ、と言われているのです。

しかしそれでは、どこからどこまで祈ればよいのか。何をどう祈ればよいのか。わたしたちは困ってしまうのではないのでしょうか。

それで、神の御子イエスさまご自身が、わたしたちに、祈り求めるべきすべてのことを教えてくださいました。それが、「主の祈り」なのです。

<主の祈り>

「主の祈り」は、必ず毎週礼拝の中で祈ります。また、すっかり覚えて、日々の生活の中で祈っているという方もおられるでしょう。「主の祈り」は、毎日祈ることをお勧めします。ぜひ、明日からでも「主の祈り」を祈り始めてください。

「主の祈り」には、わたしたちが求めるべきすべてのこと、必要なすべてのことが詰まっています。すべてのお祈りの基本です。

何よりこれは、人があれこれ考え出したものではありません。神の御子イエスさまが、直接、教えてくださった祈りです。つまり、このお祈りは、神さまご自身が、わたしたちに、心からこのことを祈るようにと、求めておられる祈りなのです。

ですから、わたしたちは「主の祈り」を通して、神さまがわたしたちに何を求めておられるかを学んでいくことができます。

そして、わたしたちは、神さまが求めておられることを知ることで、その神さまの御心に、わたしたちの心や、行いが、少しでも近づいていくことを願い求めるようになるでしょう。そうして、ますます心から、真剣に「主の祈り」を祈るようになっていく。そうして、ますます神さまとの関係を、深められていくのです。

ですから、「主の祈り」は「祈りの学校」とも呼ばれています。今日の間 119 には、そのイエスさまが教えてくださった「主の祈り」が書かれています。一度、読んでみます。

「間 119 主の祈りとはどのようなものですか。」

「答 天にましますわれらの父よ。

ねがわくはみ名をあげさせたまえ。

み国を来らせたまえ。

みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。

われらの日用の糧を今日も与えたまえ。

われらに罪をおかす者を、われらがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。

われらをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ。

(国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン)」

最初の「天にましますわれらの父よ」というのは、神さまへの呼びかけです。

そして、祈りの全体は、大きく二つに分かれています。前半の三つ、「ねがわくはみ名をあげさせたまえ。」「み国を来らせたまえ。」「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。」は、神さまに関する三つの祈りです。

後半は、「われらの日用の糧を今日も与えたまえ。」「われらに罪をおかす者を、われらがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。」「われらをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ。」の三つで、われら、わたしたちに関わる祈りとなっています。

この「主の祈り」が書かれているのは、新約聖書の二か所。マタイによる福音書の、今日読まれた6章のところと、ルカによる福音書の11章です。

少し、書かれている状況が違うのですが。ルカによる福音書は、イエスさまが祈る様子を見ていた弟子たちが、「わたしたちにも祈りを教えてください」と言って、イエスさまがそれに応えて、「祈る時には、こう言いなさい」と「主の祈り」を教えてください。

一方、今日読まれたマタイによる福音書では、まずイエスさまが「祈りについて」弟子たちに教えてください。その教えの中で、「主の祈り」を教えてください。

<だから、こう祈りなさい>

マタイによる福音書の、イエスさまの「祈りについて」の教えは、「主の祈り」を教えてください。大前提となることが語られています。それを、見ていきたいと思ひます。

ここでは、このように祈ってはならない、ということが大きく二つあげられています。

一つは、偽善者のように祈ること。もう一つは、異邦人のように祈ることです。

[偽善者のように祈るな]

まず、偽善者のように祈るとは、どういうことなのでしょう。

それは、6:5 にこのようにありました。「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。」

つまり、偽善者のように祈るとは、自分の信仰の立派さや、熱心さを、人に見てもらおうとする祈りです。そのような祈りは、神さまの眼差しの前に立つ祈り、神さまと対話する祈りではありません。むしろ、人々の視線を気にして、自分を見てもらおうとアピールする、そんな、自分が気持ちよくなるための祈りなのです。

だから、そうやって、人の前で目立つ祈りをして、満足しているということは、もうそれで彼らは報いを受けている。神さまからの祈りによる恵み、交わりの恵みを受け取ることなしに、人々からの賞賛を受けることで終わってしまっている、ということです。

でも、今わたしたちの中では、そうやって、人に祈りを見てもらいたい。そして、立派な信仰者だと思ってもらいたい、なんて思う人は、中々いないと思ひます。

そうだとしたら、このイエスさまの教えは、今のわたしたちには関係ないのでしょうか。…決してそうではないでしょう。

わたしたちは、人前で祈ることが恥ずかしい、立派に祈れない、ということを感じたことがあるのではないのでしょうか。人の祈りと、自分の祈りを比べて、あの人のお祈りは立派だ。それに比べて、自分の祈りは貧相だ、と考えたり。あるいは、あの人のお祈りより、少しはましかな、と考えたり。そんな風に思ってしまったことはないのでしょうか。

それは結局、わたしたちの祈りも、目の前で耳を傾けて聞いておられる神さまよりも、人の目を気にする祈りになっている、ということです。

共に祈ることは、他の人に、自分の立派なお祈りを聞いてもらうことが目的ではありません。神さまの御前に一緒に出て、共に願い求めて、共に心を合わせて、信仰の友として、一つの体として、一緒に「アーメン」と言う。一緒に支え合い、励まし合い、力づけられながら祈る。そのために、共に祈るのです。

ですから、ここでイエスさまが偽善者のように祈るな、と言っておられるのは。お祈りは、神さまの御前に出て、わたしのために眼差しを向け、耳を傾けてくださっている、神さまに向かって祈っているのですから、ただこの方を見つめて、ただこの方に心に向けて、祈りなさい、ということなのです。

そして、それはもちろん、一人で祈る時も同じです。わたしたちは、自分のことばかりあれこれ考えたり、他のことに心を捕らわれながら祈るなら、ちゃんと神さまの事を見つめていない。自分のことを見つめ、他のことを見つめ、神さまの眼差しを受け止めていない。神さまの御前に立って、祈っていないということなのです。

だから、イエスさまは言われます。6 節「だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。」

これは、本当にどこかの密室に入って祈れ、ということではありません。これは、あなたと、あなたの父なる神さまと、差し向かいで、見つめ合って、祈りなさい、ということなのです。そこでこそ、あなたの父との親しい交わりの時が与えられる、ということです。

祈りとは、神さまとの対話であり、交わりであり、関係を築くものだからです。

〔異邦人のように祈るな〕

もう一つ、イエスさまが仰ったのは、「異邦人のようにくどくどと祈るな」ということです。異邦人というのは、まことの唯一の神さまを知らない人たち、ということです。

当時、異教の神々を信じる人たちは、色々な神々の名前を羅列して祈ったり、繰り返し願い事を唱え、長々と祈っていたと言います。それは、祈る相手の神さまが、どんな神さまか、はっきりしていないからです。多くの神々の名前を挙げれば、いずれかの神さまの耳には届くかも知れない。だから、沢山の神さまに祈ります。また、願いをちゃんと聞いてもらえるかどうか、分からない。だから、願いを百回、二百回と唱えれば、何とか努力が認められて、聞き届けられるかも知れない。そう考えて、くどくどと祈るのです。

だからと言って、イエスさまは、願いを簡潔にまとめて、ひと言で祈りなさい、と言っているわけではありません。

イエスさまは、弟子たちに、わたしたちに、あなたはどのような相手に祈っているか、それがどのようなお方か、はっきりと知っているのだから、そういう異邦人のような祈りをする必要がない、と言っておられるのです。

イエスさまは、弟子たちにこう言われました。8 節「彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」

わたしたちは、イエスさまによって、神さまが、どなたで、どのようなお方かということ、はっきりと知らされています。

イエスさまは、神さまのことを「あなたがたの父」と言ってくださいます。

神さまは、わたしたちの造り主です。命を与えてくださったお方です。わたしたちが神さまを知る前から、わたしたちを生かし、養い、導いてきてくださったお方です。そして、わたしたちの救いのためなら、御子イエスさまの命をも、惜しまず与えてくださる。そこまで、わたしたちを愛し抜いてくださる神さまです。

そのような神さまが、わたしたちの父である。わたしたちが、そのような神さまの子どもとされている。わたしたちは、そのような親しい関係を築いて下さっているお方に向かって、祈っているのだ、ということです。

そうであるなら、父なる神さまは、子どもであるわたしたちのことを、何もかも知っておられるし、すべての必要を備えてくださるし、御手をもって、わたしたちの歩みを正しく導いてくださるのです。愛の眼差しで、初めから、今も、これからも、ずっと見つめていてくださり、共にいて、守り支えてくださるのです。

イエスさまは言われました。「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」

わたしたちの父なる神さまは、わたしたちが願う前から。わたしたちが、自分にはこれが必要だと思うより先から。わたしたちに一番必要な、最も良いものが何かを、ご存知でられます。そして、わたしたちが、自分にはこれが必要だと思っている以上に、神さまは、もっと、わたしに本当に必要なものを、ご存知でいてくださいます。

わたしたちは、はじめ、自分が罪から救われなければならない、悲惨なものである。神さまから離れて、滅びに向かっているものである。そのことも、自分で分かっていたのではないのでしょうか。

でも、神さまは、わたしたちに、罪からの救いが必要であることを知っておられた。わたしたちに、救い主が必要であることを知っておられた。わたしたちが、罪の中で苦しみ、悩み、嘆いているとき。わたしたちに、神さまの愛と、憐みと、癒しと、導きが必要であることをご存知でられました。

だからこそ神さまは、わたしたちに必要な救いの恵みを備えてくださった。ご自分の大切な独り子であるイエスさまを、わたしたちの救いのために、与えてくださったのでした。

こうして、もはや救いにおいて、わたしたちの、すべての必要を満たしてくださった神さまなのです。わたしたちが、最も必要とするイエスさまを、すでに与えてくださった神さまなのです。

そうであるなら、この父なる神さまが、これからの、わたしたちの信仰にとって、生活にとって、体にとって、人生にとって、さらに、あらゆる必要なものを、満たして下さらないはずがないのです。

「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」

<交わりを築く祈り>

…では、わたしたちは、自分の願いを知ってもらうために、もはや祈る必要は、ないのではないのでしょうか。

そうなのです。わたしたちは、自分の願いを神さまに知らせるために、祈らなくてもよいのです。つまり、イエスさまによる救いをいただき、まことの唯一の神さまを知っているわたしたちにとって、祈るということは、神さまに、自分の願いを知ってもらうための手段ではないのです。

そうではなく、わたしたちにとって祈ることは、神さまとの会話の手段。交わりの手段なのです。祈ることは、神さまが備えてくださった恵みの中で、神さまの愛の眼差しの中で、感謝をもって、喜びをもって、神さまにお応えし、神さまのことを愛し、神さまと親しく歩んでいくための、方法なのです。

だから祈りは、救いの恵みをいただいた、キリスト者の感謝の生活で、最も必要なもの、最も重要なものです。わたしたちは、愛する父なる神さまと、対話をするためにこそ、親しい交わりのときを持つためにこそ、祈るのです。

ですから、わたしたちは、祈ることを通して、神さまからいただいている恵みを知ることが出来る。これからも、必要が満たされていくことを確信できる。そして、神さまが共にいてくださる確かさの中で、慰められ、癒され、励まされ、平安を与えられるのです。

しかし、それでもなお、祈るとき、わたしたちの心の中に、不安や、恐れや、迷いが消えないこともあるでしょう。それを、わたしたちは、正直に神さまに申し上げてよい。むしろ、すべてのことを隠さずに、申し上げていくべきです。

なぜなら、わたしたちの父なる神さまは、その、わたしたちの心の不安や、恐れや、迷いも、ご存知でいてくださるからです。そして、必要なものを、必ず備えていてくださるからです。

わたしたちは、祈ることを通してこそ。この自分の弱さも、貧しさも、赦されてなお罪深い心も、父なる神さまは、すべてご存知で、受け止めて下さっていることを知ることが出来ますし。また、祈ることを通してこそ、困難な現実の中で、力強く差し伸べられている神さまの御手を、ご計画を、備えられている恵みを、見出していくことができるのです。

このように、わたしたちは、どなたに祈っているかを知っています。祈っているのが、どのようなお方かを知っています。わたしたちが祈る相手は、わたしたちの必要を、願う前からすべてご存知の、わたしたちの父なる神さまです。

このことを踏まえて、イエスさまは9節で「だから、こう祈りなさい」と言って、「主の祈り」を教えてくださいましたのです。

「主の祈り」は、父なる神さまとの、親しい交わりを築かせてくださる祈りです。

わたしたちは「主の祈り」を丁寧に学び、心から祈っていくことで、神さまの深い恵みの御心を知ることができる。神さまに与えられている恵みを知ることができる。神さまが、必要をすべて備えてくださることを経験し、神さまにこそ、すべてを求めて生きていくべきことを、身をもって理解していくことができるのです。

祈りは、口先だけのことではありません。わたしたちの生活そのもの、人生そのもの、一日一日の歩み、この一步一步を、支えるものなのです。

これから毎週、「主の祈り」の内容を、一つ一つ見つめていきます。わたしたちが、そのことを通して、ますます、父なる神さまとの関係を深められていくように。ますます、いただいている恵みの大きさを知ることができるように。ますます、神さまの御心に従っていく者へと変えられていくようにと、願います。

【お祈り】 天の父なる神さま

御子イエスさまによって救われ、聖霊によって信仰を与えられ、あなたのことを「わたしの父」と呼び、祈ることができる恵みを、心から感謝いたします。

あなたは、わたしたちの弱さも、罪も、すべてをご存知であります。あなたは、わたしたちに必要なものを、わたしたちが願う前からご存知であります。

穏やかで、心静かな時も。迷い、悩み、苦しむ時も。いつも、すべてをご存知でいてくださるあなたの御手に、守られ、支えられ、生かされていくことができますように。

あなたを心から信頼して、安心して、ただ、あなたにのみ、すべてを求めて、歩んでいくことができますように。

そして祈りを通して、ますますあなたと親しく、近く、日々を歩む者とならせて下さい。イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 447 「神のみこころは」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】

【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讃美歌】 28 「み栄あれや」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らしあなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けてあなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン